

ドイツにおけるクルド文化紹介行事に見る「文化的自画像」

— 客体化の言説と差異の問題 —

石川 真作*

A Cultural Self-Portrait at a Kurdish Cultural Event in Germany

— Discourses of Objectification and the Question of Difference —

Shinsaku Ishikawa

はじめに

近年、「地域」や「民族」に関連する様々な政治的局面において、「文化」というタームの果たす役割が拡大する中で、様々な「地域」、「民族」的集団が自「文化」を語ることの政治的意味を自覚し、それを積極的に解釈し表現している例が数多く報告されている。即ちそれは、現地の人々が自らの文化について語る現象として取り沙汰されるものである。森山の言を借りれば、「人類学者の問いを受けて自文化に関する説明を余儀なくされるといったような、いわば受け身の語りではなく、自己を積極的に提示し主張する上での拠り所としてきわめて自覚的に自文化を語る」(森山 1996)語りとしてそれは認知されてきている。

落合は、そのように自ら語られた文化を「文化的自画像」(落合 1996)と表現した。ブラジルのカヤポーが写真やビデオといった「表象メディア」によって発信される自文化像を自ら管理する様子を報告した、ターナーの研究はその一例である(Turner 1991)。さらにクリフォードは、博物館の文物に対して先住民族や少数民族が権利を持ち、また自ら管理するといった例が多く見受けられるようになったことを指摘し

ている(Clifford 1988:248)。

そこで本稿では、このような現象の一例として1997年8月にドイツ連邦共和国ノルトライン・ヴェストファーレン州デュッセルドルフにおいて行われたクルド系芸術家団体による行事を取りあげ、そこで描かれる「文化的自画像」を考察する。このような行事は、ある民族・地域集団が自文化を「客体化」(太田 1993, Handler 1984他)する場として働くと考えられる。その客体化の局面にあたっては、自己にとって自明にして身体化されたものであると想定される文化が、説明可能でさらには選択、操作されうる客体として提示されるとされる。そこで、ここではまず彼らがどのような解釈を行い何を選択するのか、あるいはどのようなイデオロギーを用いて何を操作するのか、といった点に着目し、そこから彼らが自文化を語る意味について若干の考察を試みたい。

この行事を紹介する前にドイツ在住のクルド人と彼らが構成する団体についてごく簡単に紹介しておく。ドイツ在住のクルド人人口は、1995年現在で35~55万人ほどと推定されている¹。その多くは、1961年から1973年の間ドイツとトルコの間で行われた2国間協定に基づいて労働者として来独した、あるいはそれに関連し

* 文化人類学 移民とエスニシティ

て何らかの形で来独したトルコ出身者である。さらに、労働者として来独した人々の他に、難民としてやってきた人々も含まれている。彼らの生活状況は同じ出身国(主にトルコ)の住民のそれに埋没してなかなか見えにくいのが実状である(Schmalz-Jacobsen und Hansen 1997:97)。移民の多くが定住外国人として外国籍のまま留まっているドイツでは、彼らの大部分を占めるトルコを出身国とするクルド人は統計上トルコ人とされており、日常的にはトルコ語あるいはドイツ語を用いて生活し、その範囲で社会的あるいは宗教的な生活を送っているケースが多く見受けられる。そんな中で、彼らの存在が明確に捉えられる場として、彼らの構成する様々な団体とそれを核として行われる行事が挙げられる。

ドイツには定住外国人によって設立された団体がそれこそ無数に存在するが、クルド系の団体ももちろん多く存在しており、多くが左翼的民族主義的傾向を持っていると言われる(Zentrum für Türkeistudien 1997:165)。これは、クルド社会党(PSK)と近いと言われるクルディスタン団体連合(KOMKAR)や、クルド労働者党(PKK.1993年以来ドイツでの活動を禁止されている)と関係があるといわれるいくつかの団体の存在が影響している。ただし当然ながら個別の小さな団体の活動目的は芸術活動など様々で必ずしも政治的目的に限定されるわけではない。しかし同時に、それらと上記のような団体との関係は明らかになりにくいと言える。

デュッセルドルフ・クルド村

1997年8月15日から8月31日までの17日間、デュッセルドルフ郊外の南公園においてクルドの村・デュッセルドルフ(Ein Kurdisches Dorf in

Düsseldorf)と題した行事が行われた。主催はデュッセルドルフに隣接するノイスにあるノイス・クルド芸術家の家(Haus der kurdischen Künstler e.V. Neuss)およびドイツ・クルド団体連合(Föderation kurdischer Vereine in Deutschland e.V.)、ヨーロッパ・クルド団体同盟(Konföderation kurdischer Vereine in Europa)であり²、デュッセルドルフ市長と州の外郭団体の後援をうけている。

この行事を実際に取り仕切っていたのはノイス・クルド芸術家の家である。以下、聞き取りをもとにこの団体を紹介する。この団体は、クルド文化、文学、芸術の研究と創作、紹介といった活動を目的として、1993年に設立された。音楽、民族舞踊、演劇、写真、文学など様々な分野にわたって、創作活動を行うメンバーがおり、同時に教室を開いている。また、今回のようなクルド文化の紹介イベントや会議なども企画している。正式メンバーは60名ほどだが、各地から100名を越えるプロの芸術家を動員することができるという。そして教室参加者は相当数に上るとのことであった。現在ノイスに土地建物を借りて本部としており、ここには写真/演劇、音楽、舞踊のためにそれぞれスタジオがあり、民族楽器、ビデオ、カセット・テープなどが収集、保管されており、それらを使って一般向けに様々な教室を開講している。今後はさらに拡充して学校として組織を整えていきたいと考えており、いわば「クルド文化アカデミー」といったものを設立することを目標としている。そのために今回のイベントなどを通してドイツ社会に認知を促し、そのようなプロジェクトに対する公的、私的支援を求めたいと考えている。その背後には、非常に豊かな歴史的背景を持つと彼らが考えているクルディスタンの地域文化について、ヨーロッパではあまりにも認知されて

いないという認識がある。また、全く違った生活様式の中で豊かな自己の文化を忘れていく傾向のある在独クルド人たちに実際に自分たちが生きるのは自文化においてであるという自覚を促す、という目的も持っている。さらにその背後には、各民族にはそれぞれの機構(政府など)がありそれを価値観が裏打ちしている、そしてこの価値観は芸術家や文学者が創造している、という認識がある。

さて、この行事に際して配布されたチラシには以下のような文章が添えられている。

「『人種主義と外国人敵対感情に対抗する』ヨーロッパ年において私達は、ヨーロッパでこれまでに類のないプロジェクトによるクルド文化の紹介の試みを行います。そこでの私達の目的は、『野蛮なクルド人』という一般的イメージに反駁、廃棄し、クルドの生活様式の描写を通して真実の像をそれに換えることにあります。

この野外展示において、2週間にわたって設立される『博物館村』という形で、クルドの村の生活が体験できます。そこでは、すべての設備を備えたクルドの遊牧テントを建て、石と粘土でできた原型に忠実なクルドの家を、機能的にかつ巡回可能に建設することが考えられています。

それらのテントや家は皆、絨毯、装飾やクルディスタンの日常生活道具を備えています。さらに村には、訪問者のためにクルドの日常生活の家内、手工芸活動を視覚的に案内する『住民』がいます。木工、手工業(機織り、糸紡ぎ、刺繍など)、料理、パン焼きから羊の皮袋でのバターづくりなどなど。

展示には、演劇、映画、コンサートや講演、さらには全てのしきたりを伴った本物のクルド

の結婚式が含まれています。

私達とともに数時間クルドの村を体験しに来て下さい。がっかりはしませんよ！」

会場で配布されたプログラムにもこれとほぼ同じ文章が掲載されており、ここに本行事の概要は大体網羅されている。催し物は、上で「博物館村」と表現される常設展示と、毎日午後から行われる様々なイベントの二つに大きく別れていた。

イベントには上記の通り、様々な内容のものがある。大別して音楽、民族舞踊、講演が主となる。音楽にはクルドのいわゆる伝統音楽を演奏するグループや歌手、クルド人のポップ・バンド、歌手が多く出演し、その他にギリシャ音楽のグループやドイツ人のロックバンドも出演していた。また、民族舞踊の名の下では、クルドの民族舞踊グループの他に在デュッセルドルフ団体による旋舞祈禱(Semah)も行われた。また、講演はクルドの民族舞踊、衣装、神話など民族文化の紹介から、クルディスタンの考古学やクルドの女性運動について、また「民族の権利とクルドの権利」と題されたものなどがリストアップされており、多くは主催団体のメンバーによって行われた。その他に、詩の朗読、映画(主にドキュメンタリー「クルディスタンの日常生活」など)の上映、また、クルディスタンの「伝統的な」結婚式の再現などが行われた。

常設展示は、上記「博物館村」を構成する遊牧テントや「家」(実際には発泡スチロール製)そして「芸術作品」³群で構成されている。遊牧テントには絨毯やキリム、衣類、飾り皿、チャイ(お茶)の道具や石臼(模型)、皮袋などの「日常生活用品」が展示されていた。「芸術作品」は「ディヤルバクルの市壁」「バトマン川の橋」

「妄想の頂」「焼失した村の破壊された家」といったタイトルが付けられていた。それらはトルコ共和国国内での様々な風景や情景を模してつくられたジオラマのよなものであり、すべて発泡スチロールで作られていた。

解説や講演における言説

これらの「芸術作品」にはそれぞれ解説が付けられている。少し煩雑になるが、それらを紹介する。

「アメド(ディヤルバクル市の旧名)の最初の市壁はフルリ人の時代よりずっと以前に築されました。(中略)

市壁は5キロにわたり、(中略)その金属で縁取られた黒っぽい石たちはクルディスタンの文学においてサーベルの鞘に比されました。

(中略)

すでに長くから都市は旧市壁を越えて発展し、その尊い廃墟では今日、『クルディスタンの隠れた首都』と呼ばれ、村々から追放されたクルド人達の避難場所となった近代的大都市、ディヤルバクルの子供達が遊んでいます。」「(ディヤルバクルの市壁)」

「この有名な、バトマン市近郊に1147年に作られた橋は、長さ1510mあり、中東で最も重要で保存の良い橋梁建築のひとつです。(後略)」(「バトマン川の橋」)

「海拔2100m、東西を5～9mの高さの巨像に守られた、焼けつく太陽の下人力で築かれた高さ50mにおよぶ砂利の墓標、そのように自称ゼウスと大アレクサンダーの子孫、コマゲネの神王アンティオコス1世⁴は自己の不死性を表現したが、2000年以上にわたる太陽、風、寒気は、砂岩でできたギリシャーペルシャのモニョ

メントを侵食し、ゼウスやヘラクレスさえも倒壊へ導いたのだった。」⁵(「妄想の頂」写真1-4)

「生命が根絶され駆逐されてしまうと、クルドの村の家々はこのような有り様です。これまでに3000を越えるクルドの村が、トルコ軍および『特殊部隊』によって殲滅され、焼き尽くされ、一部は消滅させられました。住民は強制的にその家を放棄させられました。

生業によって良好な生計を立てていたかつての村人達は、現在クルドやトルコの大都市周縁の、一片のプラスチックで雨露をしのぐだけの避難所で、極端な貧困の中にいます。

人権団体IHDは、いかなる公的援助もなしに、このような人々を飢餓から救うことを模索しています。」⁶(「焼失した村の破壊された家」写真1-5)

実際に見て回る際には、さらに口頭による解説が加わる。「バトマン川の橋」に対する解説では、これがトルコ人による破壊にあったとの説明が付け加えられ、また、「妄想の頂」の解説では、これはクルド人の祖先が建立したものであり、やはりトルコ人による破壊にあったと付け加えられもした。⁷

「博物館村」に展示されている「日常生活用品」は、一見するところトルコの土産物屋で販売しているものと変わりがなく、ドイツでもトルコ人が多く居住する地域ではしばしば目にするものである。それらについての解説としては、これらは本来クルディスタンで使用されていたものであり、それが現在トルコで一般に使用されるようになったということであった。

これらの言説を裏打ちするイデオロギーが、講演などの中で繰り返し表明されている。その核心をなす主張は、クルディスタンの文化は古

代メソポタミア以来のアナトリアの地域文化の残滓であり、クルドはメソポタミア文化の正統な後継者である、というものである。⁸この行事を運営するノイス・クルド芸術家の家は、クルド文化のみならず、その「周辺」文化も研究、実践の対象としているということであった。即ち、ラズ、チェルケス、アラブ、ギリシャ、アルメニアなど、「中東全域に住む人々」（あるいはトルコ国内の少数民族か）の文化を対象にしているという。しかし、トルコ文化は対象にしていない。というのは、トルコ文化というものには存在しないというのが彼らの主張なのである。現在、トルコ共和国でトルコ文化とされているものは、メソポタミア以来のアナトリア文化をその源とするものであり、中央アジアから移動してきたトルコはその篡奪者でしかない。トルコ人はそれをトルコ文化として取り扱っており、かつ外部からもそう認識されているが、本来それを担っているものは、クルドを中心としたアナトリアの先住民族達である、と彼らは考えているのである。

このイデオロギーに基づいて、この行事は構成されている。そこでは、ギリシャ音楽の演奏や、マケドニア系王朝であるセレウコス朝の遺跡であるネムルート山の巨像も、メソポタミア文明から連綿と続くアナトリア文化の一部として、クルド文化と結びつけて語ることが可能になる。

若干の考察

さて、この行事において彼らが自ら語ることによって客体化した彼らの文化において、どのような解釈が行われ何が選択されているのか、あるいはどのようなイデオロギーを用いて何が操作されているのであろうか。

この行事において用いられた「文化」「芸術」というタームによって説明される各展示の内容、またイベントや展示解説など様々な局面において行われた言説には、アナトリアの地域文化に対する自文化の歴史的正当性を強調する内容が多く含まれている。彼らの言説においては、現在のクルディスタンと歴史的領域であるメソポタミアの領域的重なりを根拠にその古代文明、さらにはそれ以来脈々と受け継がれる(とされる)アナトリア文化の正統の後継者、あるいは本来の担い手として自らを位置づけているのである。

また同時に、ここにはある種の政治的意図が見え隠れする。即ち、エスニック・マイノリティとしてのクルド人に対するトルコ共和国による抑圧的行為を告発する内容が多く含まれている点である。そこでは、自らを政治的抑圧の被害者として位置づける言説が行われている。そしてこれは、トルコを文化の篡奪者とする言説と結びつく。つまり、トルコは政治的抑圧者であると同時に、文化の篡奪者であり、それに対する自己は政治的非抑圧者であり、篡奪された地域文化の正統の後継者であり、かの豊かな文化の本来の担い手である、とする分離主義的傾向をはらんだひとつの強調点が見てとれるのである。⁹いわば、彼らはそのような強調点を持って自らの文化を客体化し、文化的自画像を描いたのである。

ここから見てとれることは、彼らが「文化」というタームを用いることの有効性を認識しているであろうことである。ひとつには、現在のヨーロッパにおける新たな移民問題に関するリベラルな言論の中で、多文化主義あるいは文化的多元主義に対していわば先験的にプライオリティが与えられていることが背景にあると想定できる。そこでは、尊重されるべきものとして

の移民やマイノリティの「文化」、という語り口が用いられることによって、一種の判断停止状態がもたらされる場合がある。そんな中では、「文化」「芸術」というタームを用いることによって、想定される批判を巧みにかわしながら自己の主張を有効に行うことができる。その意味で、まさに彼らは「文化を闘争のターゲットにして」(太田 1993:388)いる。

ひとつの想定される批判として、ここで客体化され提示された彼らの「文化」が、果たして本物なのか、あるいは、「芸術」は芸術たりえるのか、ということがある。西洋近代のタームとしての「文化」「芸術」には、それぞれ一定の意味内容が与えられていることを前提とすると、彼らがここで提示するものが、「本物の」文化であるのか、あるいは芸術的「傑作」であるのか(Clifford 1988:224参照)、はなはだこのころもとなく感じられる。しかし、それはあくまで西洋近代の概念としてのそれである。クリフォードの言を借りて、「芸術と人類学の連動した、支配的なコンテキストはもはや自明で明白なものではない。非西洋の事物や文化的記録が『属する』別のコンテキスト、歴史、未来がある」(Clifford 1988:248)のだとすると、このような解釈の様式は、西洋近代の概念を縦横に活用して表明されてはいても、その場のコンテキストにおいて事実となりうるものである。それが普遍的に受け入れられるか否かは別の領域に属する問題であり、西洋近代の普遍的影響力と結びついた概念のみを参照し、事実と虚構の二分法にはめこむことで、西洋近代の支配的言説を追認してしまう単純な本質主義的態度は現在採るべきではないだろう。¹⁰

確かに彼らの言説はレトリックにみちみちている。ここで用いられている一連のレトリックは、主に西洋近代において「普遍的」に認知さ

れている諸々の歴史認識、概念体系、地域区分、人権意識などモラルの体系、ある種の政治的態度などに依って立ちながら、それらを大胆に換骨奪胎していくものである。その意味で、これらのレトリックを用いていくことは、ド・セルトーの言う「戦術」に属するものであるといえる(ド・セルトー 1987)。そして、さらに彼らの目指すところとして別の次元が見え隠れする。はっきりとは語らないが、彼らの言説にはかなり明白にクルド・ナショナリズムに基づく分離主義の傾向が現れている。このナショナリズムに基づいてクルディスタンという想定された彼らのホームランドを回復する意図が背後にもしあるのだとすると、ここで行われていることは、これらの「戦術」を積み重ねていくことによって、相手方との関係を管理しうる自己の場に基づいた「戦略」に結びつけていこうとする意図に基づいていると言いうるかもしれない。

一方で、少し角度をずらした説明の仕方として、これを移民先社会における彼らのエスニシティの発露であるとする見方が成り立つ。構成主義的視点から言うと、エスニシティは不断の相互行為によって生成し、強化されるエスニック・バウンダリーに依拠するものである(Barth 1969)。そのような相互行為においてステレオタイプ化されるエスニシティは、他者的に規定されると同時に自己規定という過程を含んでいる。その際、実際にそのエスニシティを構成する文化的特徴は何でもよいとされ、相応の意図的操作がおこなわれ、状況に応じて変化することも前提とされている(Cohen, R. 1978他)。

この見方からすれば、彼らがここにおいて提示する文化的自画像はその内容がいかなるものであれ、彼らのエスニシティの発露であるといえることができる。それは、移民先社会でのステレオタイプ化されたひとつのクルド像に触発さ

れ、それに対して自己規定を行っていくという外的な相互行為の過程と捉えることができる。また、同時に内的な相互行為の過程も伴う。実際、この行事の観客は圧倒的にドイツ在住のクルド人が多く、一連の言説はエスニック・グループ内部に対して発せられたメッセージともなっている。また、ノイス・クルド芸術家の家の活動目的として、自文化に対する自覚を促すということが実際に含まれている。さらにこの行事の会期中および会期後に、全く別の場所でここでの主張と非常に似通ったクルド人の言説に出くわし、聞いてみるとやはりこの行事に参加することによって獲得した主張であったという事例もあった。これらの点からこの行事が内的な相互行為を促進し、エスニックな自覚を促し、さらにいえばバウンダリーの強化に役立ったと論ずることもできる。また、これらの言説に明らかな政治的主張が含まれている点も、エスニック・グループを政治的利益集団として理解しようとするひとつの構成主義的立場から説明できるものである(Cohen, A. 1974他)¹¹。

しかし、このようなエスニシティの発露とする立場からの説明からは、ひとつのエスニック現象として理解することはできるが、ここで行われたことそれ自体が何をもたらすのか、今ひとつ判然としない部分がある。ここで行われている文化に関する言説は、ある一定の政治的な力(それも相当の規模で様々な方面を巻き込んだ行動を伴う)と結びつくことで効果をもたらす種類のものであり、日常的な相互行為とは違った次元の、エスニシティの持つ強度に政治的な側面を意識したものであり、先に述べた「戦略」に結びついて意味をなす側面が強い。その反面、日常の相互行為的状況において持つ意味は限定される。ここに参加した内部者(クルド人)個人にとっては、一時的な精神的充足感を味わうか

もしれないが、そのような場としては持続的に存在する自文化維持の装置(団体や商店、家庭など)のほうがより機能する。一方で、外部者に対してはクルド文化に対するある種の理解を与え、外部からのステレオタイプによる「誤解」を解いた形を取りうるかもしれないが、そのような形での相互行為は一種の循環論に陥る。¹²即ち、ひとつには他者による規定に対抗してある自己規定を提示するということは、一時的に誤解を解いたような満足感にはつながるかもしれないが、それによってまた新たなステレオタイプを生み出し、同じことの繰り返しを招くこととなる。¹³つまりそのこと自体が状況の打破にはつながりにくい。それはエスニシティを論ずる際に陥りがちな循環論に類似するものであり、多文化主義の政治が果てしなく続く議論となっていく構造とパラレルをなすといえる。もちろん誤解されていると感じている何者かが誤解を解こうとする努力に対して、あえて批判を加える必然的理由はなく、またエスニシティの発露がもたらす感情的な効果も認められる。しかし、日常の相互行為において移民のホスト社会に対する適応や精神的安定をもたらす、あるいは支配的集団に対して異議申し立てを行い、それによって「居場所」を確保し存在を主張するといったエスニシティの機能的側面にはある種の限界があるように思われる。

このことは、エスニシティの概念がはらむオリエンタリストの本質主義の側面と関連する。ホールが指摘するように、きわめて構成主義的に見えるエスニシティの概念も、それが何らかの差異を前提としている点で本質主義的視線から自由ではないのである(Hall 1996)。その点で、人種やネイションといった西洋近代のオリエンタリスト的視点をはらんだ概念と同様であり、これらはすなわち、小田がサイドの用語

を用いて説明した種的同一性に基づいたアイデンティティの政治学(小田 1996)を形作る概念群である。サイドは、そのようなアイデンティティの政治学に関して、「今日の多数存在するポスト植民地国家を生むにいたった民族主義、それも独立以後再編されることのない民族主義と、よく似ている、いや、手を携えてすらいる」(サイド 1992:10)と述べている。

ここから翻って、本稿で紹介してきた行事で扱われた言説を見てみると、そこでもこのアイデンティティの政治学の力学が作用していることに思い当たる。そこで用いられる語り方は、文化の起源論、歴史的持続性と正統性、消失の予感あるいは危機感といった、民族誌的語りの(古典的)作法が用いられ、民族、文化、伝統、歴史、芸術といった西洋近代を構成するきわめて重要な概念が用いられる。それらは「戦術」的な意匠が施されていながらも、やはり差異の存在を前提としており、その意味で彼らの語りもやはり本質主義的であるということになる。そこには西洋近代の影響の根深さが窺われる。小田の言を借りれば、それはやはり「オリエンタリズムの装置のような近代の支配テクノロジーにしたがったもの」(小田 1996:846)であり、「大きな全体への統合を拒否するマイノリティの異議申し立て」としても「断片をそのままひとつの種的同一性をもつ全体とすることで、アイデンティティの政治学を反復するだけになってしまふ恐れ」をはらむものである。

たしかに彼らの言説に分離主義的な傾向が窺われる以上、それは当然差異を前提としたものであり、そこでは文化に関する民族誌的語りがひとつの役割を果たし、有効なものとして用いられることになるのは理解できる。つまり、古谷が言うように「本質主義が普遍的・一般的に是か非かと論ずるのは妥当ではな」く、「あく

までもどのようなコンテキストにおける誰の戦略なのかが重要」(古谷 1996:275)なのかもしれない。さらには、時には支配装置の残虐な暴力にさえさらされながら、厳しい政治的抑圧を受けている人々が、それに対する告発、抗議、抵抗を行っていくのは当然のことであり、そのような行動に意味を見いださないわけでもなければ、ましてやその行動自体に異論を差しささむ意図はない。しかし、ことそれが文化の語りという形をとる場合、行き着く先は袋小路となる危険性をはらんでいることを警告したい。即ちそれは、サイドの言う、アイデンティティを繰り返し主張する無味乾燥な運動による、じり貧状態に陥ると言うことである(サイド 1992)。再び小田の言を借りれば、「頑なな差異の主張によって他の断片との葛藤や断絶に苦しむのも、全体化を志向する近代の知や権力ではなく、それに抑圧されているマイノリティのほう」(小田 1996:849)ではないだろうか。それはまさにクリフォードの言う「行き詰まり」の状態である(Clifford 1988)。

ここであえて再度強調したいのは、ある一連の表象を提示し、想定される集団なり文化なりを代表させるという作法そのものが、確定的な差異の存在を前提とするオリエンタリズムを構成する西洋近代の作法であるということである。そして彼らが「文化」、「芸術」活動を主体的に行い、それによって周囲を導こうとするいわば文化エリートとして、この代表するとされた一連の表象を自ら担おうとする事は、グニューとスピヴァクの語る「許可証的人間」となることにつながる。その意味では、彼らの活動が評価されること、つまり外部者がそれを見聞きし評価し援助することによって十分に「取り扱われた」(スピヴァック 1992:111)ことになることによって、彼らが抑圧されていると認識す

る現状を構成するシステムに対して言質を与えることになりかねないとも言える。つまり、「認知だけを問題にするなら、ひとたび自分のことを認知してもらったなら、事態が、その彼もしくは彼女の存在などおかまいなしに進展しても、ただおとなしく座っているしかない」(サイド 1992:9)ことになってしまうのではないか。その意味では、近代への降伏を意味するのかもしれない。それはつまり、圧倒的に不利な状況に置かれている現状を構成している同じ土俵に自ら上がることを意味するのである。また、これら一連の差異を前提とした言説が、同時に内部の均質性を無意識ながら前提としているにも関わらず、彼らの「同胞」がドイツあるいはヨーロッパにおいて実際に生活している場で日常的に行われている相互行為とアイデンティティに関わるプロセスは、決して一様ではないことを指摘しておきたい。¹⁴そこにこそ、本稿で示したような西洋近代の概念体系に依拠した語りもたらす「アイデンティティの政治学」の袋小路とは別の何かを見いださるかもしれない。

註

- ¹ 実際の統計においては出身国の国籍別統計となっているため、正確な数は把握できていない。
- ² 後の2団体については、ドイツに居住するクルド人の生活を支援するための団体連合であるという聞き取りにおける説明以外、現在のところ不明である。聞き取りにおいては、この2者に対してノイス・クルド芸術家の家は文化団体であるとして、対置的に説明がなされた。
- ³ 案内人の解説による。
- ⁴ セレウコス朝シリアの王(B.C.69-34)
- ⁵ これはネムルート山のセレウコス朝遺跡を模したジオラマである。

- ⁶ IHDはデュースブルグに本部を置くトルコ系人権団体。
- ⁷ 筆者を案内してくれた女性はこの解説に疑問を感じているらしく、「このように言うように言われている」と繰り返し述べていた。
- ⁸ これは、ノイス・クルド芸術家の家と関係のある、メソポタミア文化センター(Mezopotamya Kültür Merkezi)の主張でもありと思われる。
- ⁹ ただし彼らは、問題は(トルコの)人々にあるのではなくてシステム(国家)にある、としている。
- ¹⁰ ここで用いる本質主義と構成主義の理論的枠組み、及びその対立構造のはらむ問題点については、(小田 1996)を参照のこと。
- ¹¹ また、ここでは先述の彼らの考え方にある、「民族の機構」と「価値観の創造」という観念と関連していわゆる「伝統の発明」という側面も含まれると見ることでもできる(ホブズボウム・レンジャー 1983)。
- ¹² もっとも、ここでの「戦略」に関わるような別次元の意図に対しては何らかの効果を与えうるかもしれないが。
- ¹³ この行事を宣伝するために配られたチラシにはきわめてステレオタイプ化された表象が用いられている(写真2)
- ¹⁴ 一例としては、もちろん分離主義的主張をもつ者もあり、彼らはトルコ国内よりずっとおおびらにそれを表出している一方で、ムスリムとしてのアイデンティティに重きを置く者は、何の抵抗もなくトルコ系のモスク団体に所属したり、一緒にコーラン教室を運営したり参加したりもしている。あるいは、便宜的にせよトルコ人を名乗る場合も多い。

<引用文献>

- BARTH, Fredrik
1969 Introduction. In *Ethnic Groups and Boundaries*. Fredrik Barth(ed), pp.9-38. Gerge Allen & Unwin.

- COHEN, Abner
 1974 *The Lesson of Ethnicity*. In *Urban Ethnicity*.
 Abner Cohen(ed.), pp.ix-xxiv Tavistock
 Publications.
- COHEN, Ronald.
 1978 *Ethnicity : Problem and Focus in Anthro-*
pology. Annual Review of Anthropology
 7:379-403.
- CLIFFORD, James
 1988 *The Predicament of Culture*. Harvard
 University Press.
 ド・セルトー, ミシェル
 1987 『日常の実践のポイエティック』山田登紀子
 訳 国文社。
 古谷 嘉章
 1996 「近代への別の入り方—ブラジルのインディオ
 の抵抗戦略—」『思想化される周辺世界』青木
 保 他編: pp.255-280 岩波書店。
- HALL, Stuart
 1996 *New Ethnicities*. In Stuart Hall. David
 Morley and Kuan-Hsing Chen(eds.), pp.44
 1-449. Routledge.
- HANDLER, Richard
 1984 *On Sociocultural Discontinuity : Nationalism*
and Cultural Objectification in Quebec.
Current Anthropology.25(1):55-71.
 ホブズボウム, エリック・レンジャー, テレンス 編
 1992 『創られた伝統』前川啓治・梶原景昭 他訳
 紀伊国屋書店。
 森山 工
 1996 「描かれざる自画像—マダガスカルにおける文
 化的統一をめぐる言説—」『民族学研究』61(1):
 81-104。
- 落合 一泰
 1996 「文化間性差, 先住民文明, ディスタンクシオ
 ン—近代メキシコにおける文化的自画像の生産
 と消費—」『民族学研究』61(1):52-80。
- 小田 亮
 1996 「ポストモダン人類学の代価—プリコルールの
 戦術と生活の場の人類学—」『国立民族学博物
 館研究報告』21(4):807-875。
- 太田 好信
 1993 「文化の客体化—観光をととした文化とアイデ
 ンティティの創造—」『民族学研究』57(4):38
 3-410。
- サイド, エドワード.W
 1992 「知の政治学」大橋洋一 訳『みずず』377:2-
 16
- SCHMALZ-JACOBSEN, Cornelia und HANSEN,
 Georg(Hrsg.)
 1997 *Kleines Lexikon der ethnischen Minderheiten*
in Deutschland. C.H.Beck.
 スビヴァック, ガヤトリ
 1992 『ポスト植民地主義の思想』清水和子・崎谷若
 菜 訳 彩流社。
- TURNER, Terence
 1991 *Representing, Resisting, Rethinking :*
Historical Transformations of Kayapo Culture
and Anthropological Consciousness. In
Colonial Situations. George W. Stocking,
 Jr. (ed), pp.285-313.
 Zentrum für Türkeistudien(Hrsg.)
 1994 *Ausländer in der Bundesrepublik Deutschland*
: Ein Handbuch. Leske+Budrich.

A Cultural Self-Portrait at a Kurdish Cultural Event in Germany

—Discourses of Objectification and the Question of Difference—

Shinsaku Ishikawa

In this paper, I will describe and analyze the context of cultural objectification, referring to discourses at a Kurdish cultural event in Düsseldorf(Germany), named Ein Kurdisches Dorf in Düsseldorf(A Kurdish village in Düsseldorf).

This event was held from August 15 to August 31 1997. It was promoted by a Kurdish immigrant art organization, named Haus der Kurdischen Künstler e.V. Neuss(House of Kurdish Artists in Neuss). This event included daily programs: theater, folkdances, folksongs, lectures, and some participants from other 'cultures'. Some 'artistic works' are also displayed there. There are, for example, dioramas of 'a destroyed house in a village scorched(by the Turkish army)' or of the ruins at *nemrutdağ* (southeast Turkey), constructed in the Seleucids era.

In short, in their discourse, the promoters described and objectified their own culture, as a legitimate heir to properties of Anatolian cultures deriving from Mesopotamian civilization. In contrast, they defined the Turks as plunderers of that culture and implied that there was no such thing as authentic Turkish culture.

This discourse should not be criticized from an essentialist(Orientalist) point of view that dichotomizes authenticity/non-authenticity. However the fact is that this discourse is itself decidedly essentialistic.

This event can be seen as a manifestation of ethnicity as a constructed phenomenon of interaction. Its discourses can be defined as survival tactics. However, the concept of ethnicity also has essentialist characteristics similar to those of race or nation. If defenders of Kurdish culture intend to combine these tactics with a divisionist strategy, they may become involved in the predominant modernist discourse. This in turn may cause their political argument on identity to fall into tautology.



写真1-1. 会場入り口：「クルド村へようこそ」と表示されている。



写真1-2. 会場全景



写真1-3. 遊牧テントのひとつ：クルディスタンの旗が掲げられている。



写真1-4. 「妄想の頂」：ネムルート山の巨像遺跡を再現している。



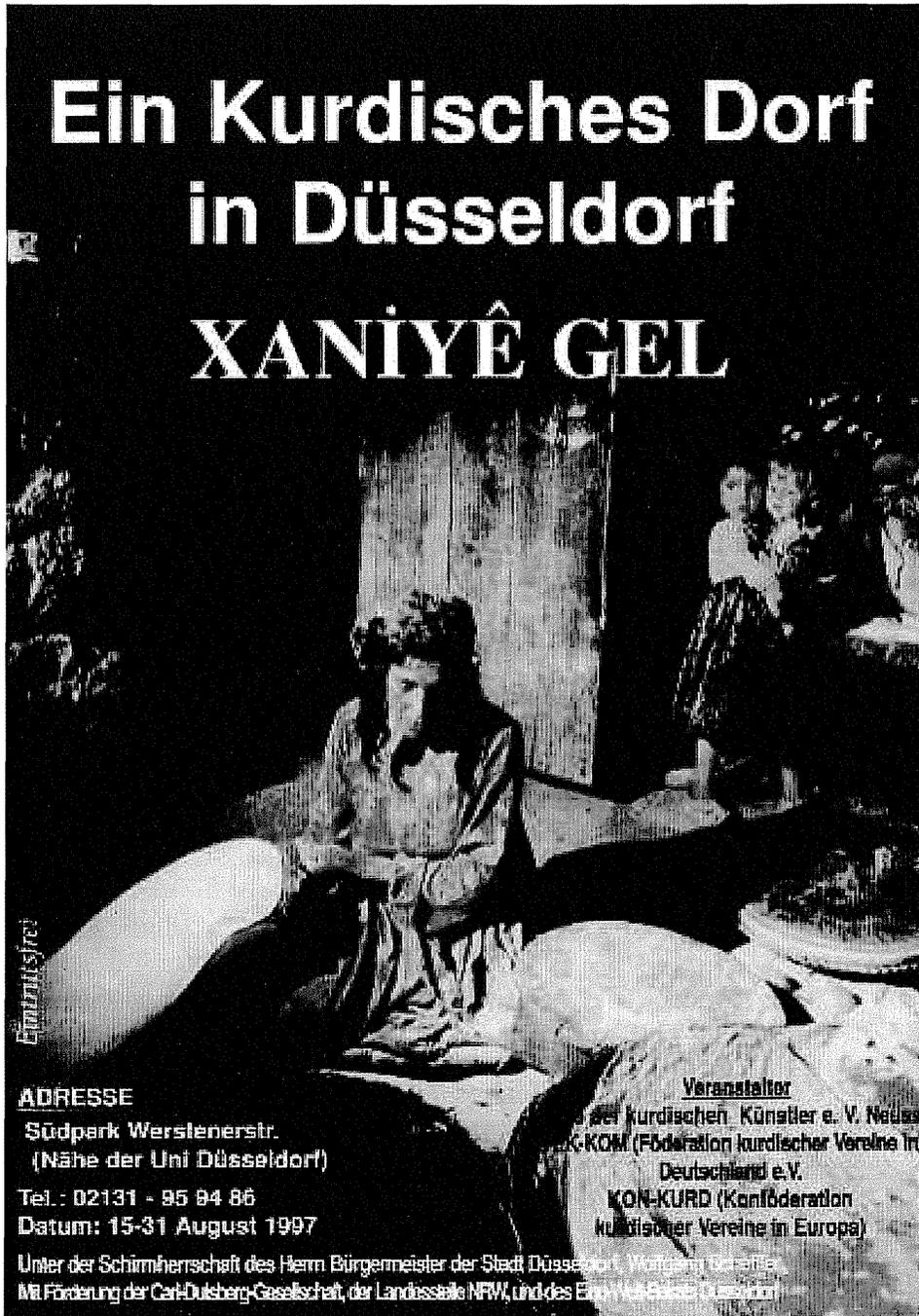
写真1-5. 「焼失した村の破壊された家」



写真1-6. 民族舞踊に興ずる人々

Ein Kurdisches Dorf in Düsseldorf

XANIYÊ GEL



ADRESSE
Südpark Werstenerstr.
(Nähe der Uni Düsseldorf)
Tel.: 02131 - 95 94 86
Datum: 15-31 August 1997

Veranstalter
des kurdischen Künstler e. V. Neusa
KON-KOM (Föderation kurdischer Vereine in
Deutschland e.V.
KON-KURD (Konföderation
kurdischer Vereine in Europa)

Unter der Schirmherrschaft des Herrn Bürgermeister der Stadt Düsseldorf, Wolfgang Dornhelle,
Mit Förderung der Carl-Duisberg-Gesellschaft, der Landesstelle NRW, und des Erzbischofs von Köln

Einmalig!

写真2. 宣伝用チラシ：非常にステレオタイプ化された表象が用いられている。